

## おわりに

本研究をまとめるにあたり、大変多くの人のお世話になった。何をおいてもお世話になった皆様に心より感謝の意を表したい。

特に、井上史雄先生には何とお礼を言ってもいいかさえわからない。学部の3年から今日まで15年以上の長きにわたり、常に鋭いご指導と温かいご鞭撻をいただいた。本研究を最後まで書き上げることができたのも、一重に長年にわたる先生の叱咤激励があったからである。ここに改めて深甚の謝意を表したい。

また、鮎澤孝子先生は論文の記述に関して様々なご指導を賜ったのみならず、研究室備付けのパソコンの「録聞見」をお貸しくださり、川田順造先生は、1960年代から80年代に及ぶご自身による東京下町方言話者との貴重なインタビューのテープをご提供下さった。さらに、宗宮喜代子先生には主にプロトタイプ論に関して、田島元信先生には主に調査・統計上の手法に関して、富盛信夫先生には、修士論文執筆時より主に言語学上の観点から様々なご指摘をいただいた。諸先生方に心からお礼を申し上げたい。先生方のご指導が本研究に十分活かしきれているとは言えないが、この研究を土台に今後も地道に努力していきたいと考えている。

本研究を曲がりなりにも最後まで書き上げることができたのは、上記の先生方のご指導のみならず、ここで一人一人お名前を挙げることはできないが、各種の調査にご協力くださったインフォーマントの方々、インタビューに応じてくださった皆さんのご協力の賜物でもある。改めてお礼を申し上げたい。

本研究は、「はじめに」及び本文中でも触れたが、筆者が「尻上がり」イントネーションに着目したことがその端緒となったと言える。それは大学院(修士課程)の井上ゼミで取り上げられたのが直接のきっかけであったと思う。当初は自分で使っているとは少しも気付かず、流行を追いかけるような、当時の言葉で言うと「ミーハーな」若い女が使う、語尾を引っ張るイントネーションだというくらいの認識しかなかった。ところが実際は、筆者も「だからあ、この場合はあ…」などと、授業中の発言でも平気で使っていた。「まさか自分もミーハー女の仲間だったとは」と思うと同時に、「いや、私のは違う。そんなつもりじゃない。」とあわてて否定し、言い訳を探そうとしたのを覚えている。それがまた、自己嫌悪に拍車をかけた。なぜなら、人の方言や話し方を笑うなんて、失礼極まりない、どんな言葉も等しく価値がある、という「文化相対主義」を信奉していたはずなのに、自分も「差別主義者」だった上に、卑怯にも自分だけは「被差別者」から逃れようとしていたからだ。何のために社会言語学を学んできたのだろうかと考えざるを

得ず、また、自分の言葉の名誉を回復するため、自分の偏見や差別意識を分析するため、そして、さらには2年で修士論文を出さなければならなかったため、不勉強も省みず、慌てて調査にとりかかった。

この当該イントネーションの印象や使用意識を問う聞き取り調査の結果をふまえ、拙いながらも社会言語学的分析を加えて修士論文にまとめ、博士課程では、音声分析ソフトによるピッチの抽出や、当該イントネーションの典型を探るための合成音声を利用した聞き取り実験などを行ったり、当該イントネーションの認知の地域差を調べたりすることができた。これも井上先生のご配慮により、調査の場や発表の機会を利用させていただくことができたからに他ならない。

しかし、イントネーションをどのように記述していくか、という壁に突き当たり、あれこれ試行錯誤のために相当な時間を浪費してしまった。やがて、パソコンの性能も向上し、統計処理ソフトが利用可能な環境が整った。付け焼刃ではあったが、統計関係の入門書を読みあさり、「判別分析」というものがあることを知った。「とりあえずやってみよう」と、読み上げ音声のピッチを抽出し、拍の長さとともに説明変数としてイントネーション型とアクセント型の判別分析を行った。読み上げ音声だけあって、均質的なデータが得られたせいか、予想以上に高い的中率が得られた。この方法を応用したのが本研究である。

この方法自体が最良の方法かどうかはわからない。統計の専門家から見れば、あるいは非専門家から見ても、まだまだ問題が多いかもしれない。実際、計測するのにも手間がかかるし、数値を読み取るのは人間だから、絶対的に客観的かと言われたら否である。この点を改良するため、本文中にも述べたようにさらに多くの被験者を対象にして知覚実験するのも一つの方法だが、自動的にパタンを解析してくれるようなソフトが開発される方が早いかもしれない。

さらに、執筆が長引いた原因でもあるが、本研究をまとめる過程で、イントネーションから韻律全体へ、そして場面の問題へと、問題意識も広がり、さらに「話調」という、ほとんど忘れかけられていた言葉を掘りおこしてしまった。「話調」という点から、いわゆる「尻上がり」イントネーションを見直していくと、単にイントネーションの問題だけにとどまらず、談話全体の問題と韻律の問題をうまく繋ぐことができるのではないかと思いついた。話し言葉における「文体」ということで、「話体」という言葉が散見できるが、「文体」という言葉と同様「高い」、「低い」という価値観と切り離せないように感じられたためと、やはり話し言葉の調子というニュアンスが出したかったために、あえて「話調」を採用した。もっと多くの談話場面について、特にもっと改まりの程度の低い砕けた雑談の場面や議論紛糾で大荒れの討論談話なども試したかった。しかし、これらは今後の課題の一つである。

「とりあえずやってみよう」で始めたため、音声談話の選び方に工夫が足りなかったと反省している。「アンケート調査後に、より良いアンケート調査票ができあがるものだ」というようなことを井上先生がおっしゃっていたが、本当にその通りだと思った。第5章ではイントネーションの離散性について、プロトタイプ論的視座から論じた。筆者なりにイントネーションの離散性について考えをまとめることができたと同時に、自身の勉強不足を痛感するのにも役立った。

本研究では、イントネーションや韻律を単なる記号として捉えるだけでなく、「話調」を構成する一つの要素として、社会的な文脈において捉えようとした。その過程は一方で、それらを「単なる記号」として扱うことが、実は非常に難しいことであることを再認識する過程でもあった。人間の独特の知覚という問題が関わっているのはもちろんだが、日本語を母語とする筆者は、知らないうちに日本語及び日本社会のフィルターを通して日本語を見聞きしている。いわゆる「尻上がり」イントネーションも、研究対象にするまでは、しっかりと日本社会のフィルターを通して見ていたわけである。本研究ではイントネーションという通常はほとんど自覚化されずに発せられる光彩を社会言語学というプリズムを通して見ることで、それまで自分が覗いていたフィルターの正体が垣間見えたように思う。その正体を十分明らかにした、とまでは言い難い上に、今後の課題や別の機会に譲った問題が山積している。本研究も含め、それらの課題への挑戦が日本語の新たな社会言語学的研究の端緒となれば幸いである。

長期にわたった本研究の執筆中には、5度の引越しと2児の出産、子育てなど個人的なイベントがあり、これらが何らかの形で本研究に影響を与えていることは確かである。最後に筆者の放蕩を理解し支えてくれた家族(特に夫佐々木寛)・友人及び巣鴨第一保育園、長嶺保育園の先生方に心より感謝しつつ、本研究についての不備は一切筆者の責任に帰すことを確認して終えた。